

## 我が国の看護大学生の援助要請の研究の動向

## Trends in Research on Help-seeking by Nursing Students in Japan

石田直江<sup>1)</sup>・高橋方子<sup>1)</sup>・富樫千秋<sup>1)</sup>

Naoe ISHIDA, Masako TAKAHASHI and Chiaki TOGASHI-ARAKAWA

【目的】本研究では、看護大学生の援助要請について、どの程度の事象が明らかとなっているのかを知ることが目的とする。

【研究方法】文献情報データベースは、『医学中央雑誌 Web 版』、『最新看護索引 web』、『CiNii』、『J-STAGE』、『国会図書館オンライン (NDL ONLINE)』、『J-GLOBAL』、『J-DreamIII』を用いた。「援助要請」と「看護学生」及びその類語をキーワードとし、発表年・論文の種類は限定せず検索を行った。

【結果】検索の結果、71 文献が抽出された(検索日: 2022 年 8 月 17~18 日、8 月 26 日)。「学術論文としての形式が整っている」「研究対象者が看護学生である」「論文中に援助要請に関する記述が含まれている」「和文献」の選定基準を満たす 6 文献を分析対象文献とした。援助要請に関する研究結果について、①被援助者が抱える問題やニーズ、②援助者、③援助要請の内容に分けて記述し、被援助者の抱える問題やニーズには、学業面では、看護学実習上での問題と臨地実習以外の学業で生じる問題がある、臨地実習指導者が援助者であることが多い、援助要請行動は、実習指導者や看護師に相談行動が多かった、ということが明らかとなった。

【考察】看護大学生の援助要請の意思決定や行動は、看護学実習に関するものが多かった。また、援助者となっているのは臨地実習指導者が多かった。看護大学生は実習指導者から直接学び、指導を受けているため、直接援助を求めやすいということが考えられる。大学生という年代から考えると、実習以外でも様々な問題を抱えている可能性があるが、問題の状況の認識や自己解決の可能性の判断、援助要請の必要性についてはまだ明らかにされていない。

- 【結論】
1. 看護大学生の援助要請の意思決定や行動について、看護学実習上の問題に関するものが多かった。
  2. 看護大学生の援助者となっているのは臨地実習指導者としているものが多かった。
  3. 看護大学生の問題の状況の認識や自己解決の可能性の判断、援助要請の必要性については明らかにされていない。

## I. はじめに

個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは重要な対処法略の 1 つである<sup>1)</sup>。DePaulo<sup>2)</sup>はこうした現象を援

助要請と定義し、その典型例を示しており、援助要請とは(1)個人が問題やニーズを抱えていて、(2)もし他者が時間や労力、資源を費やしてくれるなら、問題が軽減したり解決したりするもので、(3)ニーズを抱える個人は他者に直接的に援助を求めるものと説明している。本田<sup>3)</sup>は、問題を抱えてから他者に援助を求めるまでの流れとして、問題状況を認識し、自己解決の可能性を判断し、相談の必要性を検討してから他者に援助を求めると述べている。助けを求める意識と行動の過程について、高木<sup>4)5)</sup>は、援助要請生起のプロセスは大きく「問題の知覚」「援助要請の意思決定」「援助要請の実行」という 3

連絡先: 石田 直江 [naishida@cis.ac.jp](mailto:naishida@cis.ac.jp)

1) 千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Chiba Institute of Science

(2022 年 9 月 30 日受付, 2022 年 1 月 11 日受理)

段階に分けられると述べている。援助要請には、被援助志向性という認知的な枠組みの中で個人に起こった問題が認知され、援助要請行動に繋がるという関係性があり、この過程を経て、援助要請による問題への対処は行われる。「助けて」ということを他者に援助を求めることと位置づけ、現代社会を「助ける-助けられる」という側面から見ると、「助けて」と言えない人(個人)、「助けて」が届かない社会(環境)という姿が見えてくる<sup>3)</sup>との指摘もある。他者に援助を求めるということは、問題解決の可能性を高めるために有益だが、うまく機能しない現実があることが想像できる。

このような現代社会において、松本ら<sup>6)</sup>は、若者の特徴を表す一つの視点として、スマートフォンの普及とコミュニケーションのあり方に目を向けている。若者は SNS に日常的に触れることで、知り合いとの関係性を常に確認しているという<sup>7)</sup>。また、Williams ら<sup>8)</sup>も同様に、若者には仲間からの受容を重視する価値観があることや、SNS によって友人関係を密にする傾向があることなどを挙げている。若者にとって他者の存在というのは、彼らの意識や行動に少なからぬ影響力を持つことが伺える、と述べている<sup>6)</sup>。

現代社会における、若者にあたる大学生の援助要請に焦点をあててみると、2019 年に行われた大学等における学生支援の取組状況に関する調査<sup>9)</sup>では、悩みがあっても相談に来ない学生への対応や、複雑かつ多様な相談内容への対応等について、学生相談に関する取り組みの必要性の高い課題と報告されていた。援助要請について、大学生の先行文献を俯瞰すると、援助要請行動に関する研究は 10 年前に比べて増えてきているという水野<sup>10)</sup>の指摘の通り、大学生を対象とした研究は一定数あった。しかし、その中で看護大学生など看護系の学生を対象とした研究は 2 割程度とあまり多くはなかった。援助要請行動についての関心が高まり研究も充実してきている一方で、看護系の学生に関する研究はまだ少ない現状が推察された。

看護大学生は、学生生活において講義・演習・臨地実習と様々な経験をしながら看護学を学んでいく。実際、看護大学生は、実習や演習科目が多いこと、学内や臨床での人間関係などに加え、対人援助の特徴である患者との関係性や実習でのケアのあり方など、看護職者と共通する経験をする事が多い。看護大学生は、大学教育の中で看護学を学ぶという大学生としての経験と、看護実践の場で医療従事者としての知識や技術を修得したり、対象者の援助を行いながら実践を学んだりするという看護職者としての経験の両方を合わせもつ。看護大学生は、大学生の抱える問題と、看護実践の中で様々な経験を通して体験する困りごとなど、様々な問題やニーズを抱えており、看護大学生としての特徴を有した援助を必要と

するのではないかと考えた。

援助要請は個人が問題を解決する可能性を高めるために有益であるため<sup>3)</sup>、看護大学生として看護学を学ぶ期間に、援助要請の必要性を理解し身に着けることで、学生としての問題を解決することに繋がり、大学生の抱える問題と、看護実践の中で様々な経験を通して体験する困りごとなどの様々な問題を乗り越える能力を身につけるのではないかと考える。そして、将来的には看護師としてメンタルヘルスの問題を解決し、長く活躍し続けることができる一助となるのではないかと考える。

そこで、本研究は、我が国の援助要請について、どの程度の事象が明らかとなっているのかを明らかにする。看護大学生の援助要請についての研究は、中国の Lui et al.<sup>11)</sup>や、Luan et al.<sup>12)</sup>の報告があるが、文化の違いが影響することが考えられ、我が国の研究のみを対象とする。

## II. 研究の目的

本研究では、看護大学生の援助要請について、どの程度の事象が明らかとなっているのか知ることを目的とする。

## III. 用語の定義

### 1. 援助要請(help-seeking)

援助要請とは(1)個人が問題やニーズを抱えていて、(2)もし他者が時間や労力、資源を費やしてくれるなら、問題が軽減したり解決したりするもので、(3)ニーズを抱える個人は他者に直接的に援助を求めるもの<sup>2)</sup>とした。

### 2. 被援助志向性

被援助志向性とは、個人が情緒的・行動的問題及び現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的な枠組み<sup>13)</sup>とした。

### 3. 援助要請態度、援助要請意図・援助要請意思、援助要請行動

本田<sup>3)</sup>は、相談することに対する態度や考え方である援助要請態度、相談しようと思いつくことやその意志の強さである援助要請意図・援助要請意思、実際に相談する行動である援助要請行動とそれぞれの概念を説明している。この説明を用語の定義として用いた。

## IV. 研究方法

### 1. キーワード及び文献集合体の絞り方

#### (1) 文献情報データベース

文献情報データベースは、看護系論文情報の収録数が多い『医学中央雑誌 Web 版』を用いた。援助要請の概念は心理系の要素が強いため、論文の検索漏れを防ぐ目的で、『最新看護索引 web』、『CiNii』、『J-STAGE』、『国会図書館オンライン (NDL ONLINE)』、『J-GLOBAL』、『J-DreamIII』の 6 つのデータベースも併せて用いた。

## (2) 検索式

検索式は、『医学中央雑誌 Web 版』、『J-DreamIII』では、#1 (「援助要請」or 「help-seeking」or 「援助希求」or 「被援助志向性」or 「援助要請行動」)、#2 (「看護学生」or 「看護学生-患者関係」or 「看護学校」or 「看護教育」or 「看護学生」or 「看護専門学校」or 「看護大学」or 「看護系大学」or 「看護系大学生」or 「看護大学生」)、#3 は #1 and #2 とした。

『最新看護索引 web』、『CiNii』、『J-STAGE』、『国会図書館オンライン (NDL ONLINE)』、『J-GLOBAL』では、検索式を、#4 (「援助要請」and 「看護」)、#5 (「help-seeking」and 「看護」)、#6 (「被援助志向性」and 「看護」)、#7 (「援助希求」and 「看護」) とした。「援助要請行動」は、「援助要請」の用語を含むことで「援助要請」と同じ検索結果となったため検索から外した。

発表年・論文の種類は限定せず、検索を行った。

## 2. 分析対象文献の選定

分析対象文献の選定基準は、「学術論文としての形式が整っている」「研究対象者が看護学生である」「論文中に援助要請に関する記述が含まれている」「和文献」の条件を全て満たすこととし、該当文献を選定した。

本研究では、対象研究を日本の看護大学生を対象とした援助要請に関する研究としたため、分析対象文献を「和文献」に限定した。

## 3. 分析方法

まず、分析対象文献を、タイトル、研究目的、研究対象者、研究の種類、著者名、誌名、巻号、ページ、発表年により整理した。

次に、援助要請に関する研究結果について、DePaulo<sup>2)</sup>の定義を参考に、①被援助者が抱える問題やニード、②援助者、③援助要請の内容に分けて記述した。援助の内

容については、援助要請研究の分類に用いられている援助要請態度、援助要請意図・援助要請意思、援助要請行動の 3 つの側面から分類した。

## V. 研究結果

検索の結果、71 文献が抽出され(検索日: 2022 年 8 月 17~18 日、8 月 26 日)、選定基準を満たす 6 文献を分析対象文献とした。対象が新卒看護師の文献が 1 件あったが、看護学実習における相談行動に焦点をおいており、看護大学生の行動について述べていたため分析対象文献とした。また、3 年課程の看護師養成所の学生を対象とした文献も 1 件あったが、看護大学生と同年代であり、看護学を学修する者であることを考え、分析対象文献とした。

### 1. 研究の動向

分析対象文献の年次推移は、2017 年から 2020 年までに各年 1 件、2021 年は 2 件の研究論文が発表されていた。研究目的では、援助要請に関する研究が 5 件、メンタルヘルスリテラシーの方法の一つに援助要請をあげていたものが 1 件であった。研究対象者は、看護学系の学生を対象としたものが 5 件、看護系の学生を含む医療系の大学生を対象としたものが 1 件あった。研究対象者の学年は、学年を限定しているものが 3 件、全学年を対象としているものが 1 件、新卒看護師の学生時代の経験を対象としているものが 1 件あった。研究の種類は、量的研究が 5 件、質的研究が 1 件であった。質的研究は、科研費研究として行われた研究であり、後に結果を基に尺度開発の研究が行われていた。量的研究では、援助要請の測定用具として援助要請スキル尺度<sup>14)</sup>、援助要請スタイル尺度<sup>1)</sup>、学業的援助要請尺度<sup>15)</sup>が用いられていた。(表 1)

表1 分析対象研究一覧

No.	タイトル	研究目的	研究対象者	研究の種類	測定方法	著者	誌名、巻(号)、ページ	発表年
1	看護大学生の臨床実習指導者に対する援助要請尺度の開発	看護大学生の臨床実習指導者に対する援助要請尺度を開発し、尺度の妥当性と信頼性を検証する。	看護系大学に在籍する3,4年次生。外国籍、留年経験者、浪人経験者、社会人経験者は除外した。	量的記述的研究(質問紙法)	看護大学生の臨床実習指導者に対する援助要請尺度、援助要請スタイル尺度	①五十嵐貴大、②流木田美香子、③佐藤みつ子	日本看護科学会誌、41巻、344-353	2021
2	看護学生の援助要請スキルとソーシャルサポート、精神的健康の関連	看護学生の援助要請スキルとソーシャルサポート、精神的健康との関連を明らかにする。	看護学校(3年課程)1~3年生	量的記述的研究(質問紙法)	援助要請スキル尺度、新大学生用ソーシャルサポート尺度、日本語版GHQ28	①後藤華奈子、②山下久美子、③吉田美栄	中国四国地区国立病院付属看護学校紀要、16巻、16-28	2021
6	医療系大学4年生におけるメンタルヘルスリテラシーと課題に関する研究	医療系大学4年生におけるメンタルヘルスリテラシーの現状と、メンタルヘルスを維持促進するための課題について示唆を得ることを目的とした。 *援助要請は、メンタルヘルスリテラシーの一部、メンタルヘルス専門家への援助要請程度として位置づけされている。	医療系大学の4専攻(看護学、検査技術学、作業療法学、理学療法学)の4年生約160名	量的記述的研究(質問紙法)	精神疾患になった場合の対処法：メンタルヘルス専門家への援助要請程度 先行研究を参考に項目を選定	①八木原ひなた、②近藤浩子	群馬保健学研究、41巻、9-18	2020
3	看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因	看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因を明らかにする。	看護系大学に在籍し、保健師助産師看護師学校養成所指定規則にある看護師国家試験受験要件であるすべての看護学実習を経験した年次生。留学生及び社会人経験者は除外し、現役のみとした。	量的記述的研究(半構造面接)	インタビューガイドを用いた半構造化面接 調査内容(インタビューガイド)： ①看護学実習中に、実習指導者にどんな時に援助を要請したのか。 ②①の結果、次に解決困難な問題が生じたときの援助要請に影響があると思うか。 ③看護学実習中に解決困難な問題が生じたとき、援助要請はどのようにすれば良いのか。	①五十嵐貴大、②佐藤みつ子	看護教育研究学会誌、11(2)、15-24	2019
4	看護学実習における相談行動や就労後の自己効力感に関連する因子の検討	実習中の看護師への相談行動、および就労後の自己効力感に関連する因子を検討し、看護基礎教育への示唆を得ることを目的とした。	新卒看護師	量的記述的研究(質問紙法)	先行研究を参考に項目を選定①実習中の看護師への相談行動(A.患者ケア、B.学校との違い、C.指導の一貫性)②看護実習での体験(肯定的体験、否定的体験) 援助要請スタイル	①片山忍、②小澤三枝子	国立看護大学校研究紀要、第17巻、第1号、19-28	2018
5	看護系大学低学年における学業的援助要請と学習方略の関連	看護系大学低学年における学業的援助要請と学習方略の関連を明らかにする。	看護系大学2校の専門臨床実習の学習前である低学年(1・2年生)	量的記述的研究(質問紙法)	MSLQ 特性的自己効力感 学業的援助要請尺度	①熊谷たまき、②小竹久美子、③上野恭子、④藤村一美	大阪市立大学看護学雑誌、第13巻、29-36	2017

## 2. 看護大学生の援助要請

### (1) 看護大学生が抱える問題やニーズ

被援助者について、全学年の看護大学生を被援助者としているもの<sup>16)</sup>と、学年で分けているものがあり、看護学実習を経験した看護大学生を被援助者とするもの<sup>17)18)19)20)</sup>と、臨床実習の学習前である1・2年生を被援助者とするもの<sup>21)</sup>があった。

被援助者の抱える問題やニーズには、学業面では、看護学実習上での問題<sup>17)20)</sup>と臨地実習以外の学業で生じる問題<sup>21)</sup>があった。実習上での問題には、患者ケア・学校との違い・指導の一貫性に関する問題があり<sup>17)</sup>、臨地実習以外の学業で生じる具体的な問題は述べられていなかった。メンタルヘルスでは、精神疾患（主にうつ病）にかかったことを被援助者の抱える問題としていた<sup>19)</sup>。被援助者が抱える問題やニーズは、学年によって特徴が異なり、低学年では実習以外の学業において自分では解決することが難しい問題が生じており、高学年では臨地実習にて問題が生じるという特徴があった。看護大学生全員を被援助者とした場合に生じる問題については具体的なものは明らかにされていなかった。

### (2) 看護大学生の援助者

看護大学生が援助を求める相手について、実習上の問題に対する援助要請の研究では臨地実習指導者が援助者であった<sup>17)18)20)</sup>。メンタルヘルスに関する援助要請の研究では、家族・友人、精神保健の専門家、かかりつけの医師<sup>19)</sup>から選択されているとしていた。実習以外の学業において援助要請を行うことに焦点を置いた報告については、援助者を誰にするかについて記述はなかった<sup>16)21)</sup>。

### (3) 看護大学生の援助要請に対する意思決定・意図、行動、態度

看護大学生の援助要請に対する意思決定については、臨地実習で問題が生じた時に実習指導者に援助要請をするかどうか<sup>17)18)20)</sup>、メンタルヘルス上の問題が生じた時に家族・友人やメンタルヘルス専門家などに相談を行うかどうか<sup>19)</sup>などがあり、実習指導者への援助要請の意思決定は非要請コストの自覚と被援助利益の自覚によって行われることが示された<sup>20)</sup>。また、実習指導者への援助要請の促進要因は学生自身に関連すること、実習指導者に関連すること、環境に関連することがある<sup>18)</sup>とされており、具体的には、相談する看護師が明確である、実習での肯定的体験など<sup>17)</sup>が示された。熊谷ら<sup>21)</sup>の研究では、内発的動機づけが学業的援助要請に影響し、内発的

動機付けが高いほど自律的に援助を求め、他方、低い内発的動機づけは依存的な援助要請をすること、また援助要請を回避するという関連がみられた。また自律的援助要請は自己効力感を高めるが、援助要請を回避するあるいは依存的援助要請は自己効力感を低下される関連にあった。

看護大学生が行った援助要請行動については、実習指導者や看護師に相談などの援助要請を行った<sup>17)18)20)</sup>、臨地実習以外の学業の場で学業的援助要請を行った<sup>21)</sup>、などがあった。看護大学生の相談することに対する態度や考え方については、援助要請スキル尺度<sup>16)</sup>や援助要請スタイル尺度<sup>17)20)</sup>で測定されていた。援助要請スタイルは看護師への相談行動に影響を与える<sup>17)</sup>としており、援助要請過剰型は患者ケアでの相談行動を実行しやすく、援助要請回避型は相談行動が不実行になる傾向にあった。

(表 2-1, 表 2-2)

表2-1 援助要請に関する記述

No.	タイトル	著者	1. 被援助者が抱える問題やニーズ	2. 援助者	3. 援助要請の内容	援助要請研究の分類
1	看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度の開発	①五十嵐貴大、 ②荒木田美香 子、③佐藤みつ子	被援助者：すべての看護学実習を経験した年次生 抱える問題やニーズ：臨地実習指導者に対し援助を要請する問題	臨地実習指導者	臨地実習指導者に対する援助要請は「非要請コストの自覚」と「被援助利益の自覚」によって意思決定される。 【非要請コストの自覚】： ・自分が主体的に取り組みなければ、課題が解決しないとと思うとき ・聞いておかなければ、実習の目標が達成できないと思うとき ・自分一人の努力では実習に関する課題が達成できないと思うとき ・今、聞いておかないと、後では聞けないと思うとき 【被援助利益の自覚】： ・実習指導者は問題解決方法を知っていると思うとき ・患者の全体状の把握ができていないと思うとき ・あなたが質問することを実習指導者が推奨していると思うとき ・考えをまとめるための実習指導者の客観的な意見がほしいと思うとき	【援助要請意図・援助要請意思】 看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請尺度：「非要請コストの自覚」と「被援助利益の自覚」によって意思決定される。 【援助要請態度】 援助要請スタイル尺度
2	看護学生の援助要請スキルとソーシャルサポート、精神的健康の関連	①後藤華奈子、 ②山下久美子、 ③吉田美栄	被援助者：3年課程看護学校全学年の学生 抱える問題やニーズ：研究目的・方法・結果には問題に関する具体的な記述なし。	記述なし	看護学生の援助要請スキルの実態：「適切な援助者の選択」において、1年生より3年生が有意に低かった。援助要請の方法や相手に伝える内容に学年間の違いはなかった。 評価的サポート、情報・運具的サポート、情緒・所属的サポートを受けた人は援助要請スキルが高かった。 援助要請スキルが高いほど健康状態が良い傾向があった。	【援助要請態度】 ・援助要請スキル ・援助要請スキルはソーシャルサポート、健康問題の影響を受ける。
3	医療系大学4年生におけるメンタルヘルスリテラシーの現状と課題に関する研究	①八木原ひなた、 ②近藤浩子	被援助者：医療系大学4年生 抱えている問題やニーズ：精神疾患（うつ病）になる	家族・友人、精神的健康の専門家、情報、かかりつけの医師、電話相談相手	援助要請は、メンタルヘルスリテラシーの一部、メンタルヘルス専門家への援助要請態度として位置づけられており、精神疾患（うつ病）になった場合に、家族や友人に相談（援助要請）を行っていた。精神保健の専門家、情報、かかりつけの医師、電話相談には援助要請割合が低かった。 メンタルヘルス専門家への援助要請態度の特徴として、自分よりも他者がうつ病になった場合に選択されることが多く、自分が鬱になった場合は自分の力で対処することが多いことが示唆された。	【援助要請意図・援助要請意思】 ・治療法と精神的健康を保つ方法に関する知識：家族、友人、精神保健の専門家、情報、かかりつけの医師、電話相談相手の手の中から、精神疾患の治療法と精神的健康を保つ方法を選ぶ。



表2-2 援助要請に関する記述

No.	タイトル	著者	①被援助者が抱える問題やニード	②援助者	③援助要請の内容	援助要請研究の分類
4	看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因	①五十嵐豊大、 ②佐藤みつ子	被援助者：看護師国家試験受験要件であるすべての看護学実習を経験した年次生 抱える問題やニード：看護学実習上で生じる問題	実習指導者	【援助要請の促進要因】 ①学生自身に関連する事として、【知識と体験から自信があるとき】、【自分から行動しないと変わらないと思うとき】、【患者に影響すると感じるとき】 ②実習指導者に関連する事として、【実習指導者から接近してきてくれる】、【実習指導者は問題解決能力がある】、【実習指導者から重宝されている】 ③実習環境に関連する事として、【実習環境が良い】	【援助要請行動】 ①看護学実習中に、実習指導者にどんな時に援助を要請したのか。 【援助要請要因】 ②①の結果、次に特定困難な問題が生じたときの援助要請に影響があると思うか。 ③看護学実習中に特定困難な問題が生じたとき、援助要請はどのようにすれば良いのか。
5	看護学実習における相談行動や就職直後の自己効力感に関連する因子の検討	①片山忍、②小澤三枝子	被援助者：新卒看護師が看護学生の時 抱えている問題やニード：実習中に生じた患者ケア・学校との違い・指導の一貫性に関する問題	看護師	実習中の看護師への相談行動に影響する要因： 「相談する看護師が明確である」、「肯定的体験」、「援助要請過剰型」、「援助要請回避型」、「否定的体験(看護師要因)」、「実習の楽しさ」、「社会的スキル」。 相談内容別影響因子： 患者ケア：「相談する看護師が明確であること」、「実習での肯定的体験」[援助要請過剰型であること]「援助要請回避型でないこと」 学校との違い：「相談する看護師が明確であること」、「実習での肯定的体験」 指導の一貫性：「相談する看護師が明確であること」、「実習での肯定的体験」 学生の相談行動の影響要因：援助要請スタイル	【援助要請行動】 ①実習中の看護師への相談行動 (A.患者ケア、B.学校との違い、C.指導の一貫性)、②看護実習での体験(肯定的体験、否定的体験)、③実習中の相談体制(病院の看護師について、何かを相談したいと思えば、たれに言えばよいか明確だったか、実習病院)についての質問紙を作成。 【援助要請経路】援助要請スタイル尺度
6	看護大学生1学年における学業的援助要請と内的動機づけならびに学習方略の関連	①熊谷たまき、 ②小竹久実子、 ③上野恭子、 藤村一美	被援助者：看護大学の専門臨床実習の学習前である低学年の学生 抱えている問題やニード：学習面において直面する、自ら解決できない問題	記述なし	学業的援助要請(援助要請が学習面において行われること)が行われる。 学業的援助要請には、依存性・非適応的・果敢的援助要請、自立的・適応的・進歩的援助要請がある。 【学業的援助要請の影響因子】 内的動機づけ：内的動機づけが高ければ、自立的援助要請は行われやすいが、依存性・回避的援助要請は行われにくい傾向にある。 自己効力感：自己効力感と自立的援助要請は正の関係、回避的援助要請は負の関係があった。依存性援助要請との関係は認められなかった。 学習方略の媒介効果：認知的方略と自己調整を行っているものほど自立的援助要請が高く、努力調整などの自己調整が低いほど依存性援助要請行動をとり、精緻化・体制化等の認知的方略の活用の高さが援助回避を高めていた。	【援助要請行動】学業的援助要請尺度 【学業的援助要請の影響因子】 内的動機づけ 自己効力感 学習方略の媒介効果

## VI. 考察

### 1. 看護系の援助要請に関する研究の特徴

援助要請の研究は、わが国では1987年に社会心理学の分野で初めて紹介され、教育心理学、カウンセリング心理学や臨床心理学の分野と広がってきた<sup>13)</sup>。そして、援助要請、被援助志向性の研究は2000年代後半より10年ほどで急速に研究が増加しているという現状がある<sup>10)</sup>。援助要請の考え方は、心理学の分野のみならず、教育、医療・福祉、産業、司法と様々な分野で取り入れられている。徐々に看護の教育現場でも援助要請の必要性が増してきているといえる<sup>22)</sup>。看護大学生を対象とした援助要請の研究は、2007年頃よりみられ、2013年よりその数が増えてきていたが、そのほとんどは学会発表に留まっていた。2017年ころから論文として発表されるようになって、その数もわずかに増えてきている。

研究方法では、量的な手法を用いる研究が主なものであり、測定用具として、援助要請スキル尺度、援助要請スタイル尺度、学業的援助要請尺度が用いられていた。心理学の分野では、様々な角度から援助要請をとらえられるように尺度が多数存在しているが、看護も、これらの尺度を活用して様々な角度からとらえようとしている現状が伺える。そのため、量的な手法を用いた研究が多くなっていると考えられる。しかし、既存の測定用具だけでは臨床実習で学生が抱える問題のように看護大学生に特有の問題の細かな部分までは把握できないため、五十嵐ら<sup>18)20)</sup>のように、看護独自の尺度開発も試みられるようになってきている。

看護研究の中の援助要請研究は、件数としてはまだ少ないが、援助要請の概念は様々な分野で注目されてきており、看護研究においても今後さらに研究が増加していくことが予想できる。

### 2. 看護大学生の援助要請

#### (1) 看護大学生が抱える問題やニーズ

看護大学生が援助要請を実行している事象から学生の抱える問題やニーズについてみてみると、具体的な問題についての記述はなかったものの、学業、特に看護学実習にて看護大学生が何らかの問題を解決するために指導者に対して援助要請を行っているとして研究されているものが多かった。このことから、看護大学生の他者の援助を必要とする問題やニーズは、看護学実習に関するものが多くといえる。看護学実習は、学生・指導者・患者の関係を中心に、医療従事者や患者の家族、他の学生などが複雑に関係する授業であり<sup>18)</sup>、看護学実習において看護大学生は、看護上の判断が困難な様々な場面に遭遇する<sup>17)</sup>。青木ら<sup>23)</sup>は、学内で学習した看護技術を初めて患者に実施する際、使用物品や手順が異なっていたり、患者の健康レベルが様々であったりするため、学生は基

礎看護学実習から各領域の臨床実習において学生は困難に直面することを指摘している。看護大学生は、看護学実習の複雑な人間関係の中で、様々な困難を抱えていることが伺われる。

一般大学生が抱える問題には、大学等における学生支援の取組状況に関する調査<sup>9)</sup>や、奥久田<sup>24)</sup>が述べているように、修学上の問題だけでなく、日常生活上の問題、人間関係や進路・就職など多岐にわたる。看護大学生の援助要請に関する研究は、大部分が学習に関する事であったが、同年代である看護大学生も、大学生と同様に看護学実習などの学習に限らず、様々な問題を抱えているのではないかと考える。

#### (2) 援助者と援助要請行動

看護大学生を対象とした援助要請研究にて看護大学生の援助者となっているのは臨床実習指導者としているものが多かった。実習上の問題に焦点を当てている研究が多かったため、必然的に援助者も臨床実習指導者が多くなったことが理由の一つであると考えられる。しかし、臨床実習の際、看護大学生の援助者となり得る人は、臨床実習指導者以外にも存在する。個人が自分で解決することが難しい問題を抱えた時、援助を求める相手は、インフォーマルな援助者（家族や友人）とフォーマルな援助者（専門家など）に分けられる<sup>10)</sup>。末木<sup>25)</sup>は、我々は日々、さまざまな問題を抱えながら生きており、自分一人では問題に対処しきれなくなると誰かに助けを求めるといふことがあり、このような場合、多くの人はその問題の専門家を頼るよりも、まずは身近な人に相談をするだろうと述べているように、家族や友人といった身近な人の方が援助者として選択されやすい。しかし、看護大学生が援助を求める援助者は家族や友人などインフォーマルな援助者よりも、専門家である臨床実習指導者を援助者とする報告が多いという現状がある。臨床実習では、困難に直面した時の相談を行うだけでなく、片山<sup>17)</sup>が、看護大学生は臨床の場で看護師がどのような根拠に基づいて判断・行動しているかなどに関心を持ち、自ら判断し考え、わからないことは看護師に確認することが必要と述べているように、実習指導者から看護を学ぶことも学習効果として期待されている。看護大学生は実習指導者から直接学び、指導を受けているため、直接援助を求めやすいということが考えられる。一方、家族や友人といった身近な人より専門家を援助者に選択するということは、看護大学生の抱える問題を解決するために適切な援助者という側面と、援助を躊躇うなど、阻害的に働く側面もあるということ意識する必要があると考える。

#### (3) 看護大学生の援助要請経路

看護大学生の援助要請に関する研究の分類をみると、



援助要請意思・意図、援助要請行動、援助要請態度とその影響要因に関する研究であり、援助要請研究の3つの側面それぞれから研究されていた。

本田<sup>3)</sup>は、援助要請のとらえ方は様々であっても、すべてが「悩みを相談すること」という同じ現象を違う側面からとらえているため、お互い関連し合っていると考えることができるとして、援助要請の側面の繋がりについて述べている。それによると、人が悩んでから相談するまでの心理の流れである援助要請の経路について、5段階あると説明している。第1段階は、何か困ったことがあるか、悩みごとがあるか、という「問題状況の認識」の段階、第2段階は、「自己解決の可能性の判断」を行う段階である。問題状況を認識し、自己解決が難しいと判断された場合、第3段階の「相談の必要性の検討（相談をするかしないか）」として、自分が行う様々な対処方法の中で、他の人に相談するという対処が必要かどうかを検討する。他者に相談の必要があれば、身近な人（インフォーマルな援助資源）と専門家（フォーマルな援助資源）のそれぞれに対し、第4段階となる「相談の意思決定（誰にするか）」を行う。相談する意思決定をした後は、身近な人にでも専門家にでも「相談すること」が最後の5段階となる。援助要請経路の中では、援助要請意図・意思は第3段階と第4段階、援助要請行動は第5段階と対応するとし、援助要請態度は個人が悩む前からともと有しているものとしている。そして、人が悩みを抱えてから援助を要請するまでの心理的な流れの中で援助要請の各側面（態度、意図・意思、行動）を組み合わせてバランスを見ていくと、「助けて」と言わない（言えない）人の心理は「困っていない」「助けて欲しいと思わない」「助けてと言えない」という3つに大きく分類できると考える。

この援助要請経路に看護における援助要請研究の分類を当てはめてみると、「援助要請の意思決定」と「援助要請行動」およびそれらの影響要因、援助要請全体に影響する考え方に着目されており、「問題状況の認識」、「自己解決の可能性の判断」、「援助要請の必要性の検討」に該当する研究は見当たらなかった。また、援助者を看護師に限定して専門家への援助要請の意思決定に着目するという心理カウンセリングの流れ<sup>13)</sup>と同じような研究の動向になっている、ということがわかった。

#### (4) これからの看護大学生の援助要請

看護大学生の援助要請の意思決定や行動について、看護学実習上の問題に関するものが多く、看護学実習以外での援助要請の意思決定や行動について明らかにする必要がある。また、大学生という年代から考えると様々な問題を抱えている可能性があるが、問題の状況の認識や自己解決の可能性の判断、援助要請の必要性については

まだまだ明らかにされていないことが言える。援助要請するかしないかで悩み、援助が必要なのに、相談できないということが看護大学生に起きており、援助を必要としているのではないかと考える。本田<sup>3)</sup>の提唱するモデルである援助要請経路と援助要請の各側面のバランスに当てはめて看護大学生の援助要請の現状をみると、専門家（臨地実習指導者）に援助要請不実行となる自己解決が困難で援助要請の意図・意思が高く、行動をしていない、つまり「助けて」と言えない現状がわかる。また、問題状況の認識から援助の必要性までの研究がされていないという現状がある。

また、看護大学生の援助要請に関する研究は臨地実習に焦点をおいているものが多いが、援助者として看護教員に焦点を当てている研究は見当たらなかった。しかし、教員も看護大学生にとっては援助者になり得る。国外の研究では、教員が看護大学生を支援するための方略などの研究報告<sup>26)</sup>があり、教員が果たす役割はあると考える。

今後は、看護大学生の抱える個人では解決が難しい問題にはどのようなものがあるか、どのように援助の必要性を判断しているかについての研究を深めていくこと、看護大学生の援助者として援助行動を行える様々な支援者について明らかにしていくこと、助けてと言えない看護大学生の援助要請についてさらに研究を深めていくことが必要となると考える。

## Ⅶ. 結論

看護大学生の援助要請について、文献検討により、以下のことが明らかになった。

1. 看護大学生の援助要請の意思決定や行動について、看護学実習上の問題に関するものが多かった。
2. 看護大学生の援助者となっているのは臨地実習指導者としているものが多かった。
3. 看護大学生の問題の状況の認識や自己解決の可能性の判断、援助要請の必要性については明らかにされていなかった。

今後は、看護大学生の抱える個人では解決が難しい問題にはどのようなものがあるか、どのように援助の必要性を判断しているかについての研究を深めていくこと、看護大学生の援助者として援助行動を行える様々な支援者について明らかにしていくことが必要となると示唆された。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、千葉科学大学図書館事務室の皆様にも多大なご協力をいただきました。深謝申し上げます。

げます。

## 分析対象文献

- 五十嵐貴大, 荒木田美香子, 佐藤みつ子 : 看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度の開発. 日本看護科学会誌, 41, 344-353, 2021.
- 後藤華奈子, 山下久美子, 吉田美栄 : 看護大学生の援助要請スキルとソーシャルサポート、精神的健康の関連. 中国四国地区国立病院付属看護学校紀要, 16, 16-28, 2021.
- 八木原ひなた, 近藤浩子 : 医療系大学4年生におけるメンタルヘルスリテラシーの現状と課題に関する研究. 群馬保健学研究, 41, 9-18, 2020.
- 五十嵐貴大, 佐藤みつ子 : 看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因. 看護教育研究学会誌, 11(2), 15-24, 2019.
- 片山忍, 小澤三枝子 : 看護学実習における相談行動や就職直後の自己効力感に関連する因子の検討. 国立看護大学校研究紀要, 17(1), 19-28, 2018.
- 熊谷たまき, 小竹久実子, 上野恭子, 藤村一美 : 看護系大学低学年における学豪的援助要請と内的動機づけならびに学習方略の関連. 大阪市立大学看護学雑誌, 13, 29-36, 2017.

## 引用文献

- 1) 永井智 : 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—. 教育心理学研究, 61(1), 44-55, 2013.
- 2) DePaulo, B. M. Nadler, A., & Fisher, J. D. (Eds) : Perspectives on help-seeking. New Directions in Helping. Volume 2 Help-seeking. 3-12, New York, Academic Press, 1983.
- 3) 本田真大 : 援助要請のカウンセリング—「助けて」と言えない子どもと親への援助. 金子書房, 東京, 2015.
- 4) 高木修 : 援助行動の生起過程に関するモデルの提案. 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21, 1997.
- 5) 高木修 : 人を助ける心—援助行動の社会心理学. サイエンス社, 1998.
- 6) 松本大吾, 宮澤薫 : 同伴他者が若者の消費行動に及ぼす影響—学生とその親世代に注目した探索的研究—. 国府台経済研究, 29(1), 73-93, 2019.
- 7) 太田 恵理子 : 若者のライフスタイル—成熟社会に生きる若者と格差—. マーケティングジャーナル, 34(4), 5-22, 2015.
- 8) Williams, Kaylene C., Robert A. Page, Alfred R. Petrosky, and Edward H. Hernandez : Multi-Generational Marketing:

- Descriptions, Characteristics, Lifestyles, and Attitudes. Journal of Applied Business and Economics, 11(2), 21-36, 2010.
- 9) 独立行政法人日本学生支援機構: 大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (令和元年度 (2019年度))  
[https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_torikumi/2019.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2019.html)  
 (2022年5月11日確認)
- 10) 水野治久 : 監修援助要請と被援助志向性の心理学—困っていても助けを求められない人の理解と援助. 金子書房, 東京, 2018.
- 11) Liu Annuo, Gong Juan, Wang Lulu, Liu Hongyan, Deng Wenrui, Luan Qianqian, Wang Chenchen, Wang Qi : Study on the relationship of the academic help-seeking, loneliness and adaptability in college nursing students. Zhongguo huli guanli, 17(2), 193-198. 2017.
- 12) Luan Qianqian, Wang Lulu, Liu Hongyan, Gong Juan, Deng Wenrui, Wang Chenchen, Wang Qi, Shu Renli, Niu Xia, Liu Annuo : Survey and analysis of college nursing students' academic help-seeking behavior. Huli Yanjiu, 31(8), 1004-1006, 2017.
- 13) 水野治久, 石隈利紀 : 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向. 教育心理学研究会, 47, 530-539, 1999.
- 14) 本田真大, 新井邦次郎, 石隈利紀 : 援助要請スキル尺度の作成. 学校心理学研究, 10(1), 33-40, 2010.
- 15) 野崎秀正 : 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響. 教育心理学研究, 51, 141-153, 2003.
- 16) 後藤華奈子, 山下久美子, 吉田美栄 : 看護大学生の援助要請スキルとソーシャルサポート 精神的健康の関連. 中国四国地区国立病院付属看護学校紀要, 16, 16-28, 2021.
- 17) 片山忍, 小澤三枝子 : 看護学実習における相談行動や就職直後の自己効力感に関連する因子の検討. 国立看護大学校研究紀要, 17(1), 19-28, 2018.
- 18) 五十嵐貴大, 佐藤みつ子 : 看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因. 看護教育研究学会誌, 11(2), 15-24, 2019.
- 19) 八木原ひなた, 近藤浩子 : 医療系大学4年生におけるメンタルヘルスリテラシーの現状と課題に関する研究. 群馬保健学研究, 41, 9-18, 2020.
- 20) 五十嵐貴大, 荒木田美香子, 佐藤みつ子 : 看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度の開発. 日本看護科学会誌, 41, 344-353, 2021.
- 21) 熊谷たまき, 小竹久実子, 上野恭子, 藤村一美 : 看護系大学低学年における学豪的援助要請と内的動機づけならびに学習方略の関連. 大阪市立大学看護学雑誌, 13, 29-36, 2017.
- 22) 水野治久監修 : 事例から学ぶ 心理職としての援助要請の視点—「助けて」と言えない人へのカウンセリング. 金子書房,

東京, 2019.

23) 青木光子, 岡田ルリ子, 関谷由香里, 徳永なみじ, 相原ひろみ, 和田由香里, 野本百合子 : 基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処. 愛媛県立医療技術大学紀要, 5(1), 57-64, 2008.

24) 與久田巖 : 女子短大生における援助要請と大学生活不安との関連. 大阪夕陽丘学園短期大学紀要, 55, 11-17, 2012.

25) 末木新 : 心理的サポートに関する援助要請行動の意思決定要因-身近な人に対する認識に焦点をあてて-. 臨床心理学, 8(6), 843-857, 2008.

26) Lee CJ : Educational innovations. Academic help seeking: theory and strategies for nursing faculty. Journal of Nursing Education, 46(10), 468-475, 2007.